

## 《論 文》

## 奥田都市社会学から何を継承するか

渡 戸 一 郎

## はじめに

近年になって、中堅や若手の研究者による戦後日本社会学の再評価の取り組みが目立つようになった。例えば、2015年に刊行された大谷信介・山下祐介・笹森秀雄編『グローバル化時代の日本都市理論』（ミネルヴァ書房）は、大谷・山下という中堅の都市／地域社会学者が中心となって鈴木榮太郎『都市社会学原理』（1957）を読み直す試みであり、鈴木から直接教えを受けた老練の社会学者・笹森の参加を得て上梓されている。また、2016年刊行の奥村隆編『作田啓一 vs. 見田宗介』（弘文堂）は、中堅・若手によるここ数年の共同研究を土台に出版された。ほかにも、学会報告などで若手研究者による戦後社会学のレビューが試みられている。

こうした動向の背景のひとつには、社会学という学問の界<sup>シヤン</sup>にあって、戦後日本の社会学をリードしてきた研究者が次々に亡くなり、そうした研究者たちが生み出してきた社会学の遺産を問い直す契機となっていることがあるだろう。日本都市社会学会の第34回大会（2016年9月3日、佛教大学）では、この学問領域で主導的立場を担った鈴木広（1931-2014）と奥田道大（1932-2014）が相次いで亡くなったことを受けて、特別セッション「鈴木広と奥田道大の都市社会学の現在」が開催された。筆者はこの特別セッションの討論者として参加したが、当日の限られた時間では伝えられなかったことを

含めて、とくに奥田都市社会学から何を継承すべきか、あらためて論じてみたい。

## 1. 特別セッション「鈴木広と奥田道大の都市社会学の現在」

この企画の担当者、松尾浩一郎氏によれば、本セッションの趣旨は、「おおむね同時期に、おおよそ半世紀にわたって都市社会学の先頭で活躍してきた……鈴木と奥田（の足跡）の批判的継承を通じて、都市社会学の現在とこれからを考える未来志向の議論」を行うことに置かれた。報告者としては田中重好氏（名古屋大）と玉野和志氏（首都大学東京）が登壇し、それぞれ「鈴木広の都市社会学と今後の日本都市社会学の課題」、「グローバリゼーションと都市研究——奥田都市社会学とコミュニティ」の論題で報告された<sup>1</sup>。そして田中報告に対しては鈴木の九州大学時代最後の教え子である山下祐介氏（九州大学出身、現・首都大学東京）が、玉野報告に対しては立教大学時代の奥田の早い時期に教えを受けた筆者（立教大学出身、現・明星大学）が、それぞれ討論者を務めた（以下、敬称略）。日本の都市社会学では、時折り研究者の世代論が議論される（中筋 2002）。簡単に言えば、都市社会学の第一世代が鈴木榮太郎（1894

1 田中報告、玉野報告は『日本都市社会学会年報』35集（2017年9月刊行予定）に収録される予定である。

—1966)、奥井復太郎(1897—1965)、磯村英一(1903—1997)、第二世代が鈴木広、奥田道大、倉沢進、高橋勇悦<sup>2</sup>、中村八朗ら、そしてこれら第二世代の教えを受けた世代が第三世代ということになる<sup>3</sup>。この意味で、今回のセッションは、第三世代による提起を通じて「未来志向の議論」に展開することが期待された。

さて本セッションでは、田中・玉野の両報告とも、鈴木と奥田のコミュニティ論を議論の焦点のひとつに取り上げていたが、本稿では主として玉野報告に対する当日の筆者のリプライをベースに論じ直してみたい<sup>4</sup>。そこでまず、玉野報告「グローバリゼーションと都市研究——奥田都市社会学とコミュニティ」のポイントを、大会プログラムの梗概と当日配布のレジュメに拠りながら筆者なりにまとめてみよう。

玉野は事前配布の大会プログラムの梗概で、次のように述べている。

「奥田の都市社会学研究は郊外から始まり、やがて都心研究へとシフトし、最後にニューカマーの調査へと収斂する。したがって奥田にとっての国際化やグローバル化は、都市のコミュニティに流入した外国人とそれがもたらすホスト社会としての日本への影響という点に焦点化されていた。東京が集団就職の若者たちを受け入れて以来、蓄積してきた都市的な流儀がニュ

ーカマーを受け入れるにあたっても機能していたというのが、奥田にとっての大きな発見であった。そこから奥田の議論は異質なものを受けとめる都市性の評価へと傾斜する。都市社会学におけるエスニック研究はこの奥田の呪縛から逃れきれていないように思う。／奥田が一貫して重視したのはコミュニティのレベルでの都市性であった。人と人との関係をコミュニティという具体的なレベルでとらえるのが、奥田にとっての社会学であり、そこにおいて異質なものを許容し、それとうまく折り合っていく作法が都市的ということであった。それは外国人の流入をもたらすグローバル化を扱う場合にも変わらない奥田の問題関心であった。それが都市社会学の視点として継承されてきたところがある。しかし、それははたしてグローバル化を扱う都市社会学にとって、本当に大切な、あるいは適切な視点だったのだろうか。」(「日本都市社会学会ニュース」104号[2016年7月]における第34回大会プログラムより)

当日配布の玉野のレジュメをみよう。まず「奥田都市社会学の特質」として、戦後の民主化＝近代化＝都市化論へのコミットメントを通じて、奥田が戦後モデルの超克を目指して、村落社会とは異なる「都市と都市性(自由、洗練など)」の抽出にこだわったこと、いわゆる“奥田モデル”といわれた「コミュニティ・モデル」も単なる当為概念ではなく、一定のモノグラフに基づくものであったこと、そこには人と人の関わりに焦点を置くシカゴ学派的な社会過程論が裏打ちされ、都市コミュニティ論に展開されていたこと、が指摘される。

また、「グローバリゼーションとニューカマーズ研究」では、上記に引用した梗概の内容がほぼそのまま述べられた。そして最後の「奥田都市社会学の功罪」では、批判点として、①ミ

2 『日本都市社会学会年報』20号(2002)は特集「日本都市社会学の射程」を組み、鈴木広、倉沢進、奥田道大、高橋勇悦が「戦後日本の都市社会学——回顧と展望」に関する論考を寄稿している。

3 『日本都市社会学会年報』31号(2013)は学会創設30周年を記念する特集「都市社会学——軌跡と展望」を組み、第三世代の町村敬志、森岡清志、谷富夫が寄稿している。

4 奥田都市社会学におけるコミュニティ論については、渡戸・広田・田嶋編(2003)所収の拙稿「都市社会学ノート——奥田都市社会学のリアリティのとらえ方」を参照されたい。

クロな社会過程に焦点化した半面、世界経済、国際分業、国際労働力移動というマクロな視点が後景化したこと、②日本人や日本社会へのインパクトという関心への偏り、③普遍的な人権に配慮しない国家制度と矛盾する都市や市民性への関心の欠落、④結果として国際的な対話が困難になった日本の都市社会学、という、奥田のグローバル化研究のドメスティックな限界とそれゆえの普遍性の弱さが指摘された。正確には田中報告を含めた流れを受けての討論となった訳だが、以下に、玉野報告を受けて筆者が討論者として述べたことを再構成してみたい<sup>5</sup>。

## II. 討論者（筆者）によるリプライ

はじめに個人的な感想から述べると、奥田がニューカマーのアジア系外国人流入の受け皿となった大都市のインナーシティ・コミュニティのあり方から、都市共生の作法としての「都市的なもの」を導き出したのに対して、立教大学時代の奥田に指導を受けた広田康生（専修大学）や和田清美（首都大学東京）、田嶋淳子（法政大学）、水上徹男（立教大学）にしても、また筆者にしても、実はそこから一定の距離をとって、自分独自の研究テーマを設定しようと模索してきたと言えるのではないか、ということである<sup>6</sup>。例えば広田は、横浜市鶴見の日系ブラ

ジル人コミュニティを起点とする群馬県大泉町などの外国人集住地域の研究やトランスナショナルな社会空間と場所<sup>プレイス</sup>の研究に、一方、筆者は大都市の集住地域における市民活動／社会運動や、自治体レベルの外国人政策の研究に取り組んできた。しかし大きく見れば、玉野の指摘のように、奥田の都市コミュニティ論を土台とした都市エスニシティ論の方法論的呪縛からほとんど逃れることができていないのかもしれない。そこでまず、奥田の都市論あるいは都市コミュニティ論の特質を確認した上で、90年代以降の都市エスニシティ論の展開を確認してみたい。

「奥田都市論の基底をなすアプローチは、「都市とは人間にとって何か」と問いつつ展開した：筆者補注）、「ミクロ視角」に軸足を据えた都市コミュニティ論にある。コミュニティ研究を通じて、その時々時代の思潮や支配的価値を相対化しつつ、「マクロ視角」からのシステムとしての都市論との接続・対抗・緊張のなかで、中範囲の、リアリティある都市モデルを構想するという方法こそが、その研究を貫いてきたと言ってよい」（渡戸 2003）。したがって都市共生の作法としての「都市的なもの」も、規範的な概念というよりも、一定の都市的地域社会の文脈のリアリティを踏まえた実践的概念だったと言えよう。

5 以下のリプライは当日の草稿に若干手を入れたものである。

6 中筋（2005）によれば、「第二世代の知的な原動力は第一世代の批判的継承という課題、具体的には日本社会の都市化を都市社会構造論として探求することと、その方法として科学的な都市社会調査法を確立することにあった…。逆にいうと、第一世代と第二世代に共有された、日本社会の都市化への問題関心が、80年代以降の、全般的に都市化した社会のなかで過去のものとなったとき、その原動力は失われ、継承不可能になる他はなかったのではないだろうか」と述べ、第二世代の都

### 1. 奥田の「異質（性）認識」について

1970年代までの奥田都市コミュニティ論は、大都市郊外の住民運動の契機のなかに「普遍と

---

市社会学の問題関心の「固定化・化石化」を指摘している。奥田の都市社会学がこうした指摘にどの程度当てはまるか、議論の余地があるが、第三世代の都市社会学は90年代以降の日本都市社会の転換のなかで新たな方向性を模索せざるをえない局面に立たされたと言えよう。

してのコミュニティ」を探ろうとする試みであった。東京都国立市、神奈川県相模原市、神戸市丸山地区などがそのモデルとしてたびたび取り上げられた。このとき、奥田が一番懸念し、腐心していたのが、コミュニティの「普遍モデル」を伝統な「共同体モデル（ムラ・モデル）」（への回帰）といかにして差異化するか、という点であったと思われる（奥田 1983）。また同時に、階層的には新中間層が普遍モデルの主たる担い手であったが、その消費者市民の価値観をいかに相対化しうかがが課題であった。

この段階での異質性認識とは、郊外における農業等の自営業者や障害者などをも包摂した「よりトータルなまちづくり」の視点、あるいは既成の体制的価値観の相対化への強い志向性に表れていた。とくに70年代後期以降、奥田は「コミュニティ理念の地域論的文脈への置きかえ」に向けて、「コミュニティ理念から零れ落ちるもの（マージナルな問題）への配慮」「異主体との社会的共有価値を与件とするコミュニティ形成論」＝まちづくり運動論を展開する。こうしたコミュニティの普遍モデルの探索は、コミュニティの都市性探索の「前段階」をなしていたのではないかと考えられる。

## 2. 「都市的なもの」をめぐって

80年代になると、奥田の研究は大都市衰退問題を背景に、都心とインナーシティからなる大都市中心部へと焦点が移行し、「都市型社会」の規定のもと、本格的に都市論が論及されるようになる（奥田 1985）。そうしたなかで、「さまざまな施設を仲立ちとする、より自覚的・意志的な「都市的＝urban」な生き方、住まい方を織り込んだ「生活空間」論の現代的再検討」が課題とされた（こうした転換の背景の一つに奥田のフィラデルフィア在外研究〔1985～86〕

があったと思われる）。ここでの「都市的＝urban」が、インナーエリア・池袋旧日出町調査で見出された居住者相互の生活上のルール、作法のことであり（奥田 1991）、「さまざまな意味での異質性・多様性を認め合ったうえで、折り合って自覚的に作為的に生きようとする洗練されたライフスタイル」（行政学者・大森彌）であった。周知のように、この定義はその後、「都市共在感覚」にエラボレートされる（奥田 2004）。

90年代以降、奥田は大都市インナーシティに照準を置いた都市エスニシティ研究、および新しい都市論の構想を追究した。インナーシティ研究のねらいは、実はその重層性ある地域社会再生の文脈を通じて、大都市構造転換の新たな読みを策出することにあった。また、同時に外国人集住化をみたインナーシティでは、「普遍」としてのコミュニティの資質や条件が、①「異質・多様性」の許容度、②所与としての「住民」概念の再検討、③「個人」からの発想に対する自覚的・意志的取り組み（関係のネットワーク化）の3つの局面における課題とされた。さらに90年代末になると、「コミュニティとエスニシティ」を主題とするコミュニティ・リアリティ論のサブ・テーマとして、①場所性と磁場性を手掛かりとする「コミュニティとネットワーク」、②社会的多様性に向けた外国人居住者の「本当の受容」への展開、③「個別と普遍」の3つが掲げられる（奥田編 1999）。

こうして、奥田の都市コミュニティ論は、「異質認識を契機とする新しい共同の企て、共有的価値」を基軸とする、「普遍」としての都市コミュニティのあり方が鍵となっている。とりわけ、インナーシティのフィールドワーク実践から得られた知見に基づく、「普遍としてのコミュニティ」の射程は、都市エスニシティ論を媒介に、「異質・多様性の許容度」としての「都

市的なるもの」のリアリティの内実を示唆するものとなっている<sup>7</sup>。そこでの「都市共生の作法」は「自らの生き方の相対視を含む自己変容課題」を含むとの指摘は今日でも重要であろう。ここには、20世紀の日本都市社会学の地平を超える、トランスナショナルで重層的な“都市的世界”のありようが目指されていたと言えよう。

なお、渡戸「都市社会学ノート——奥田都市社会学のリアリティのとらえ方」(2003)では、「奥田都市社会学が示唆するもの」として、以上の①コミュニティ・リアリティ論のほかに、②「住民」「市民」をめぐる論点、③住民の自己組織力と自治体、④シカゴ学派再考と都市エスノグラフィ編集を挙げておいた。

### 3. 奥田の都市エスニシティ論の呪縛

以上のような奥田の開拓的な研究を受けて、都市エスニシティ論は90年代を通じ、(主に第三世代の研究者によって)都市社会学の一翼を担うほどに急成長し、一定の方法論と視座が確立されていき、都市社会学の共通財産を築いてきたと言える。

例えば広田は「都市エスニシティ論」再考」(2002)で、都市エスニシティ論を、「越境する生き方とその世界の探求」として出発し、①国境を超えた繋がりの中への準拠、②状況を再解釈していく実践、③個を生かす「共同性」の生成、④磁場としての「場所」の新しい意味づけという点に整理し、とりわけ都市コミュニティ論との関連で検討している。そして、都市社会学のエスニシティ研究の問題意識の根底には、こうした「越境する生き方」が生み出す、「制度化し尽くされない人間の生活世界の生成」とその可能性の追求のテーマがある、と指摘して

いることが注目される。

こうした考察を通じて、都市エスニシティ研究では、越境者の問題がますます現代社会に生きるわれわれ自身の「生き方」の問題になっていること、現代の都市コミュニティがますます移民と非移民あるいは移動者と非移動者の区別がなくなっていく世界であることを確認してきた。

また、2007年の日本都市社会学大会のテーマ部会「都市社会学はエスニシティ研究に何ができるか」では、樋口直人による国際社会学の立場から、都市エスニシティ研究が「国家」と「市場」という制度的枠組みへの目配りを欠いた研究枠組みゆえに分析視点の「地域」への内閉していること、地域内部での(無意識の)人種サイクルの適用による同化論に傾斜しているのではないか、といった批判がなされた。これに対して、解題を務めた若林幹夫は、第一に、都市社会や都市的世界というローカルな場と、その存立を支える国際社会のグローバルな構造という問題の図式は、都市社会学者の視点から必ずしも抜け落ちている訳ではないが、むしろ「都市社会学の理論と研究は国家や市場とどのように切り結んできたか」という視点から、隣接諸分野との連関を探る方が生産的だと指摘した。第二に、ナショナル及びグローバルな構造を前提とすることと、研究のフィールドや対象として都市社会や都市的世界に主に照準することは必ずしも矛盾しない。ローカルな空間はグローバルな空間の中に存在しているが、同時にまたローカルな空間の中にグローバルでトランスナショナルな空間が埋め込まれている。この意味で、都市におけるエスニシティの問題を「都市」という空間的な枠組みから捉えることに一定の限界があるのは事実だが、同時にそれが「都市」という具体的な場を通じて生きられることもまた事実である、と述べている(若林 2008)。

7 イライジャ・アンダーソン『ストリート・ワイズ』(1990=2003)もこうした観点から訳出された。

こうした若林の指摘は非常に示唆に富む適切なものだと考える。

#### 4. 今日の都市社会学の課題

以上のような奥田に端を発する都市エスニシティ論は、越境者の「個」を起点とするネットワークや「個人」の生き方に焦点を置くがゆえに、エスニック集団論からは一定の距離を保ちつつ、共生の規範論を相対化しえたと言えるかもしれない。問題は奥田が最後にたどり着いた都市コミュニティの定義、すなわち「さまざまな意味での異質・多様性を内包した都市的な場」にあって、人びとが共在感覚に根ざす相互のゆるやかな絆を仲立ちとして結び合う生成の居住世界」（奥田 2004：74）をどう受け止めるかにある。

1990年代半ば以降、多文化主義へのバックラッシュが起こり、欧米諸国では国家の「要塞化」の下で「移民の選抜」とともに「社会統合」や「同化」への志向性が強まりつつあるが、その背景には各国内のローカル・レベルの文化的多様性と社会的結束をめぐるディレンマが存在している（渡戸 2011）。ここで問題になるのは、イスラームなど文化的次元を含めて異質性を高めるローカル・コミュニティのあり方である。パウマンが指摘するように、「コミュニティ」概念には本来的に成員の一定の同質性の要件が埋め込まれているにもかかわらず、常に、そしてますます「コミュニティと差異」（G.デランティ）が問題になっている。最後に、こうした視点から、今日の都市社会学にとってどのようなことが課題とされるべきかを指摘しておきたい。

#### (1) コミュニティの異質化をどう捉えるか ——協働実践の現場から

奥田は1970年代以降、新中間層の価値観に刻印された「コミュニティ」概念からこぼれ落ちるものへの配慮をコミュニティ研究の視点としてきたが、「都市共生の作法」にも新中間層の価値観のはらむ問題が潜在しているとして、晩年にはこれを「都市共在感覚」のキーワードに変更している。奥田によれば、「共在感覚」は、「共生」とか「コモンズ」等の特定の価値観に枠づけられていない点で、越境する大都市インナーシティの厚みある地域現場の様相を率直に表現しうるものとされている（奥田 2009）。

奥田の言う「越境する大都市インナーシティの厚みある地域現場の様相」が何を指すかは別としても、筆者は東京で、新宿・大久保や板橋などにおける市民活動／社会運動の現場にかかわる中で、こうした多様な人びとが交差する地域現場の文脈を支えるのはまさに奥田のいう緩やかな「都市共在感覚」ではないかと考える。しかし、地域における住民／市民活動の現場での「多文化共生」の言説には「日本人／外国人」二分法が依然として維持されており、日本文化をもつ日本国民が文化の異なる外国人と共生することが想定される傾向が強いことも無視できない。この二分法を越えるためには、「日本国籍を取得した“〇〇系日本人”を含めて、地域社会を構成する人びとがすでに多様な出自と文化的背景、ライフコースをもつ人びとからなっていることを相互に理解し、承認しあう過程が丹念に共有されていくことが必要」であり、「そうした「場」と「しかけ」をどのように創り出していくことができるかが課題」だと考える（渡戸 2010b）。

また近年では、排外主義やヘイトデモの高まりが懸念されているが、田辺俊介たちによる

2009年の社会調査データの分析では以下のことが指摘されている。すなわち、「排外主義や外国人への否定的な態度には、脆弱な社会的地位や居住地域の外国人居住率などの客観的な社会状況を基盤とした部分がある…ため、それらの客観的状況が変わらない限り、その排外主義を変えることは難しい」と考えられる。そこで田辺は、「排外主義を弱め、同時に現代日本における新たな共同性を構築するためのカギとなりうるのは、日本人の定義を変えることによる「国民化」の可能性ではないか」と提起されている(田辺編 2011: 終章)<sup>8</sup>。

## (2) ローカル・コミュニティにおける外国人移民との「共生」の事例研究

ここではこの間、筆者がかかわった地域の事例研究から、「共生」が容易ではないことを指摘しておきたい。

### ①外国人集住団地における自治会などのあり方

日系南米人の集住する地方工業都市の公営住宅団地では、外国人との「共生問題」の解決過程を下から立ち上げ、自治会や自治体の実質的な協働を模索してきた。こうした取り組みが可能になった背景には、日系ブラジル人の定住化の進展のもと、ホスト社会側の地域リーダーの卓越したコーディネート力が発

揮され、財政力のある自治体の柔軟な協働政策がうまくマッチングしたことがあった。しかしリーマンショック後、日系ブラジル人の流動性がふたたび高まったことを背景に団地内の顔が見えない関係が広がり、自治会活動への参加者は減少し、その運営のあり方が模索されている(渡戸 2010a)。こうした異質的コミュニティ形成困難の問題解明には、都市レベルだけでなく、国家レベル、さらにトランスナショナルな視点も必要になる。

### ②大都市インナーシティの複雑系の問題構造

一方、大都市インナーシティの多文化化はより複雑系の問題構造をなしている。アジア系盛り場を抱える東京都上野の「下町」を研究している五十嵐泰正が、イースト・ロンドンの経験を引照しつつ、次のような都市での文化的多様性をめぐる重要な論点を提起している。すなわち、「多文化・マルチエスニックの混在というものを前提とした都市的現実のなかでは、地域アイデンティティの構築とは一筋縄ではいかない…。空間が商品化される現代社会での地域アイデンティティ構築とは、特定の社会的な背景のもと、外部からのまなざしに影響を受けながら構築されるものである…。そして、強固なコミュニティの存続…とレイシズムの関連という問題系を……検討すべきである」(五十嵐 2010: 89)である。

こうした都市の多文化化の複雑な社会過程にあつては、奥田のいう「都市共感覚」を手がかりに、都市コミュニティの形成とそれに絡み合うシティズンシップ(ローカル・シティズンシップ)の構築がどのようなダイナミズムと可能性を示しているか、を丹念に見ていくことが重要だろう(渡戸 2011)。

8 近年、外国にルーツをもつ子どもたちが青年期を迎え、一定のアイデンティティを実現しながら、社会的場面に登場しつつあることが注目される。例えば、2015年10月17日に開催された静岡文化芸術大学主催シンポジウム「浜松で考える多文化共生のフロンティア」、同年11月14日の多文化共生推進ワークショップ in 東京「外国にルーツをもつ若者たちの今・仕事・夢」(明治大学)、11月21日の上智大学オープン・リサーチ・ウィーク・シンポジウム「外国にルーツをもつ若者の大学進学」などでの若者たちの発言を参照。

### (3) 編入モードと受入れ社会の社会的文脈

A.ポルテスらは「編入モード」(mode of incorporation)という理論的枠組みを導入している。この「編入モード」論(Portes al. 1989, 1993, 2001)は、移民の送出国からの離脱条件と移住先での受入れの文脈といった構造的要因と、移民自身がもつ人的資本との相互作用に着目して、移民集団がさまざまな形態で受入れ社会に定着・定住していくことを説明しようとする(人見 2013)。すなわち、数多くの移民集団は受入れ社会に一樣に同化していくのではなく、多様な移住経路が生み出されることを、①送出し国からの離脱条件(労働移民か難民か)、②移民たちの出身階層と保持する人的資本のタイプ、③受入れ国の社会的な文脈(受入れ国政府の態度、雇用主とネイティブの反応、エスニック・コミュニティの有無)に注目して説明しようとする。

都市コミュニティ論に基づく都市エスニシティ論をこうした編入モード論の枠組みに連接させることが、課題となっている(渡戸ほか 近刊参照)。

### (4) 日本における移民統合政策に向けて

移民社会学者カースルズは、日本に向けた論考で、「日本はいやいやながら移民国家(an unwillingly immigration country)となった」が、厳格な帰化法のため3～4世になっても非市民に留まる在日コリアンも、1992年の法改正で次第に帰化に向かいつつあること、地方自治体は不法就労者を含め、保健・教育・福祉サービスに外国人居住者を包含しつつあること、そして、多くのボランティア・アソシエーションが移民の諸権利の改善に向けて活動していることなどの具体的な兆候をみると、日本における「移民の市民的・政治的・社会的諸権利の状況はいまだ微弱だが一次第に改善しつつある」

と述べている(Castles 2010: 186-187)。

カースルズのこの診断によれば、日本の多文化化は多くの問題(とりわけナショナル・レベルの移民の統合政策の不在)を抱えているとはいえ、徐々に新たな社会のあり方を構築してきているといえるかもしれない。だが課題は、多様な主体の協働の過程を通じて個々のローカル・コミュニティの特性と状況に即した多文化化のあり方をどのように見出していくのか、そして、そうした過程から立ち現れるローカル・シティズンシップの諸力をナショナル・レベルのシティズンシップの変革にいかにつなげてゆくことができるかという点にある。課題の焦点は、経済主義的な上からの状況依存的でパッチワーク的な外国人労働者政策の構築ではなく、下からの移民政策をめぐるポリティクスを踏まえたナショナル・レベルの政治的選択にあると言えるのではないだろうか。

逆風は吹いているが、開かれたコミュニティを起点とする、下からの、日本社会の健全で活力ある多文化社会づくりの方向を見失うべきではないだろう(渡戸 2011)。

## Ⅲ. 終わりに

### ——2020年代に向けた都市社会学の課題

以上、特別セッションで述べたことを再現してみた。あらためて稿に起こして振り返ってみると、奥田の示してきた「グローバル化と都市社会学研究」が残した諸課題をどこまで掘り下げることができたか、忸怩たるものがある。「所詮、第三世代は第二世代のエピゴーネンに過ぎない」という冷めた自戒の念もなくはない。しかし、つねに主体(個人、集団、組織)が置かれた地域社会的文脈のなかから生成する社会関係や価値の意味を読み解き、新たな物語を紡いでいこうとした奥田スタイルから学ぶべきこと

はまだまだあると考えている。

1990年代以降、日本都市の社会構造はグローバル化、情報化、サービス経済化が進展する一方、2000年代からは少子高齢化、人口減少による「縮小する都市」や地方中小都市の衰退問題、単身化・貧困化の深まりなど都市家族の変容、そして都市社会の多文化化などとコミュニティ形成との関連が問われている（渡戸 2012）。筆者は近年の研究課題を、日本、韓国、中国、台

湾、フィリピン、ベトナムなど東アジアのリージョナルな空間的広がりの中で、人の越境移動を介して都市社会がどのように変容していつあるか、に置いている。その成果の一端は近刊の予定だが（渡戸ほか 近刊）、日本のドメスティックな空間を全体社会と想定する80年代までの日本の都市社会学が、90年代以降再構築を迫られてきたなかでのひとつのささやかな到達点になればと願っている。

### 【文献】

- アンダーソン、E.（奥田道大・奥田啓子訳）、1990=2003『ストリート・ワイズ——人種／階層／変動にゆらぐ都市コミュニティに生きる人びとのコード』ハーベスト社。
- 五十嵐泰正、2010『「地域イメージ」、コミュニティ、外国人』岩淵功一編『多文化社会の＜文化＞を問う』青弓社。
- 奥田道大、1983『都市コミュニティの理論』東京大学出版会。
- 、1985『大都市の再生——都市社会学の現代的視点』有斐閣。
- ・田嶋淳子編、1991、『池袋のアジア系外国人』めこん。
- 編、1997『都市エスニシティの社会学——民族／文化／共生の意味を問う』ミネルヴァ書房。
- 編、1999『講座社会学4 都市』東京大学出版会。
- 、2000『都市社会学の眼』ハーベスト社。
- 、2004『都市コミュニティの磁場——越境するエスニシティと21世紀都市社会学』東大出版会。
- 、2009『人びとにとって「都市的なもの」とは』ハーベスト社。
- 田辺俊介編、2011『外国人へのまなざしと政治意識』勁草書房。

- 中筋直哉、2002、『日本の都市社会学——都市社会学の第1世代』高橋勇悦監修／菊池美代志・江上渉編『21世紀の都市社会学』学文社。
- 、2005、『分野別研究動向（都市）』『社会学評論』221号（56巻1号）。
- 人見泰弘、2013『在日ビルマ系難民の移住過程——市民権・雇用・教育をめぐる諸問題』吉原和男編『現代における人の国際移動』慶応義塾大学出版会。
- 広田康生、2002『「都市エスニシティ論」再考——狭義のエスニシティ研究からトランスナショナルな都市コミュニティの研究へ』『日本都市社会学学会年報』20。
- ・町村敬志・田嶋淳子・渡戸一郎編、2006『先端都市社会学の地平』ハーベスト社。
- 、2008『都市社会学はなぜエスニシティ研究をテーマ化したか——トランスナショナルリズム論からの新たな展開』（『日本都市社会学学会年報』26。
- 、2016『奥田道大——モノグラフのなかに都市社会の理論を求めて』『社会と調査』16。
- 若林幹夫、2008『都市社会学はエスニシティ研究に何ができるか』『日本都市社会学学会年報』26。
- 渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子編、2003『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ——ポストメトロポリス期の都市エスノグラフィ』明石書店。

- 、2003「都市社会学ノート——奥田都市論のリアリティのとりえ方」同上書所収。
- 、2006「インビジブルシティを読み解く——「グローバル都市地域」としての東京を中心に」広田・町村・田嶋・渡戸編『先端都市社会学の地平』前掲書。
- 、2010a「外国人集住地域における「ローカルな公共性の再構築」が意味するもの——日系ブラジル人の集住団地の事例から」藤田弘夫編『東アジアにおける公共性の変容』慶應義塾大学出版会。
- ・井沢泰樹編、2010b『多民族化社会・日本——<多文化共生>の社会的リアリティを問い直す』明石書店。
- 、2011「多文化社会におけるシティズンシップとコミュニティ」北脇保之編『「開かれた日本」の構想——移民受入れと社会統合』ココ出版。
- 、2012、「特集：「都市社会研究の新たなパラダイムのために」によせて」『社会学評論』248号（62巻4号）。
- ・塩原良和・長谷部美佳・明石純一・宣元錫編、近刊、『変容する国際移住のリアリティ——「編入モード」の社会学』ハーベスト社。
- Castles, S. 2010, "Key Issues in Global Migration: A Human Development Approach", *Migration Policy Review* (移民政策学会編『移民政策研究』) 2号、現代人文社。
- Portes, Alejandro and Jozsef Borocz, 1989, "Contemporary Immigration: Theoretical Perspective on its Determinants and Modes of Incorporation." *International Migration Review*, 23(3), pp. 606-630.
- Portes, Alejandro and Min Zhou, 1993, "The New Second Generation: Segmented Assimilation and Its Variants," *Annals of American Academy of Political Science*, Vol.530.
- Portes, Alejandro and Ruben G. Rumbaut, 1996, *Immigrant America: A Portrait*, University of California.
- Portes, Alejandro and Ruben G. Rumbaut, 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation* (=村井忠敬訳『現代アメリカ移民第二世代の研究——移民排斥と同化主義に代わる「第三の道」』明石書店、2014)。

(わたど いちろう／本学科教授)